

第四十四章 鉄道の旅

ウクライナー共和国はソシア軍を押し返してクリーム半島を除くプチレンコン大統領が併合宣言をした四州の大半を取り戻した。その一方でソシア軍はサボリーナ原子力発電所の占拠を続けてクリーム半島に電力を送電し続ける。地上戦は冴えなかったが、ミサイル攻撃で発電設備、変電設備、送電設備、そしてダムを破壊した。広範囲で停電や水害が発生して病院や学校などの公共インフラが機能しなくなった。もちろん住宅に電気が届かない。

プチレンコンは併合した四州の独立を認めるのなら停戦に応じるとダレデモスキー大統領に提案する。もちろん一蹴された。

ところでこれだけの攻防の中、しかもウクライナー共和国のインフラがボロボロになっても鉄道網はほぼ平常どおりの運行されていた。なぜならユーラシア大陸の鉄道網は一部を除いて各国が最優先で維持しているからだ。域内の鉄道網はどのような攻撃にも耐える強力なシールドで守られている。

プチレンコンはこの鉄道網を苦々しく思っていたが、逆に戦車や兵士をウクライナーに輸送して攻撃できたのである。だが皮肉な事にこの鉄道網を使ってソシアの富裕層や若者たちが徴兵を逃れるためにソシアを脱出した。

他方、住居を失ったウクライナ国民、特に女、子供も列車で隣国に避難できた。

*

様々な特急列車が西へ東へと、あるいは北へ南へと走る。ユーロ・ライナー、ドラゴン・ライナー、イリ・ライナー、ウク・ライナー、シンフォニー・ライナー、ワルツ・ライナー、ノールベル・ライナー、キリスト・ライナー、ピース・ライナー、シルク・ライナー、ヒマラヤ・ライナー、シベリア・ライナー、オーロラ・ライナー、インダス・ライナー……。

急行列車を含めると数え切れない。駅の間隔は長いが各駅に停車する列車もある。なぜこのような鉄道網を整備したのか。それは地球環境守るためだった。

利便性はあるが自動車や航空機はエネルギー効率が悪い。その意味で鉄道はエネルギー効率が高い。そして何よりも「旅」感覚が鉄道にはある。様々な人種、金持ちもいれば貧乏人もいる。駅弁も様々。言葉が分からなくても理解し合える雰囲気がある。

空港はただっ広いだけでそこに文化はない。それに引き換え駅には文化がある。駅前には様々な店があったり駅舎の中では会話や笑いが満ちあふれる。時には華やかな社交場になる。通勤通学時は賑やかだが終電に間に合わなくて駅のベンチで眠る人もいるぐらい幅広い人間模様の舞台でもある。

*

イリは宇宙船を離れて特急の看板を外した各駅停車のイリ・ライナーに乗ってウクライナ

共和国を移動する。特急料金が要らなくなったイリ・ライナーではソシア人とウクライナー人が乗り合わせても争いはない。むしろお互いの不幸を慰め合う。

「どこでどう間違えたのかしら」

「どのようなことがあっても殺し合いは許されない」

そのとき天井のLED照明が消える。昼間なので問題はないが、夜間やトンネル内だと大変なことになる。それほど鉄道網を守るシールドは完璧かつ強力だった。どうもこの停電はウクライナー共和国内の鉄道に限られているようだった。

原因はソシア軍のインフラ、特に発電所への無差別攻撃だった。ダム破壊で洪水が起これば水力発電が停止した。大河ドニエール川が氾濫するといくらシールドされていても鉄橋が流されて列車は運行できない。さらにはトンネルが水没する。そして停電が追い打ちをかける。惰性で走行していたイリ・ライナーが鉄橋の手前で停止する。悲鳴があちらこちらで上がる。赤ん坊を抱えた母親がグッと唇をかみしめてこらえる。

荒れ狂う茶色の川沿いで停車したイリ・ライナーは進むことも戻ることもしない。イリはこれまでと違った状況に驚くばかりで戸惑う。腕時計を操作して宇宙戦艦とコンタクトを採ろうとする。そのときイリ・ライナーがゆっくりと動き出す。同時に車内放送が流れる。

「この列車は十両編成の各駅停車ですが、平たく言う通勤電車のような列車ですが、一両だけ気動車を連結しています。日頃は地球温暖化対策もあってエンジンを停止していますが、電

源が確保できないのでこの気動車を使って運転を再開しました。とりあえずこの先の駅に停車します」

乗客は安堵するとともに天井のスピーカーに拍手を送る。

「ありがとうございます。ところでお願いがあります。燃料に限りがあります。後ろ五両を切り離してできるだけ総重量を軽くしたいのです。前の車両に移動をお願いします」

歓声上がる。先ほどの赤ちゃんを抱いた母親が立ち上がるうとするとなぐのおばさんが声をかける。

「ここは三両目。動く必要はないわ。私は後ろの車両から来る人のために前に行くわ」
周りで「そうだ、そうだ」という声上がる。

このように国籍、性別、年齢に関係なく協力し合う。

「六両目以降の車両でまだ前に移動していない人がいないか確認をお願いします」

真っ黒な髪とヒゲと眉毛とまっげで顔全体がブラックボックス化した車掌が前方から後方へと走り抜ける。そして五両目まで戻ってくると後尾の装置をいじくって六両目との連結器を切り離す。車両が離れていくのを寂しそうに見つめる車掌に静かな拍手が送られる。振り返り帽子を取ると車掌は深々と礼をする。

「ご協力ありがとうございます」

そして膝を突いて土下座する。

「さらにお願ひがあります。不要な物がありませんでしたら窓から捨ててください。衣服は結構です。凍死するかもしれませんから。ほんのわずかでも結構です。終わりましたら窓を完全に閉めてください」

各停のイリ・ライナーの窓が開く。戦争で着の身着のまままでこの列車に乗ったから捨てるものはほとんどなかった。車掌がおもむろにマスクをする。そしてマスクを配り始める。

「車内は三密状態です。マスクの着用をお願いします。誠に申し訳ありません」

文句を言う乗客は誰一人いない。イリは黙ってこの車掌の行動を眺めていた。適切に物事を進めながら安心感を提供する。

*

各停イリ・ライナーに翼を持ったドローンが近づいてくる。ソシア軍の攻撃用ドローンだ。

「わあ！」

車内が騒然となる。その声に車掌が即反応する。混雑する中、窓に近づき開ける。

「空気を入れ換えます。少し冷えますが我慢のほどを」

そう言うのとたすき掛けした黒い革のバッグから切符切りハサミを取り出す。乗り越し精算用の切符を持ってパンチするとそのハサミから光線が外に飛び出してすぐそこまで近づいているドローンに命中すると消滅する。

一瞬、乗客が静まりかえるが、すぐさま歓声が沸くと車掌が説明する。

「タダ乗りしようとしたので拒絶しました」

前よりも大きな歓声が起こるとすかさず車掌が両腕を広げる。

「コロナ感染のリスクがありますので拍手のみでお願いします」

さつと静かになって割れんばかりの拍手に変わる。

「未だ電力供給を受けることができません。気動車のガソリンも底を突きました。惰性で走りますが、次の上り坂手前で停車します。誠に申し訳ありません」

誰も車掌に文句を言う者はいなかった。イリが車掌をねぎらおうと近づいたとき車掌は先頭車に向かう。乗客の中に車掌の背中が消える。